第３報告（講演会報告／翻訳）

批判的実在論；その研究手法と研究デザイン

ジャン・Ch. カールソン（Jan Ch. Karlsson）[i]，中澤　平[ii]訳

（本報告は，Stephen Ackroyd and Jan CH. Karlsson; Critical Realism, Research Techniques, and Research Designs in Paul Edwards, Joe O'Mahoney & Steve Vincent (eds) *Studying Organizations Using Critical Realism: A Practical Guide.* Oxford: Oxford University Press (2014).；ステファン・アクロイド，ジャン Ch. カールソン著「批判的実在論，研究手法，研究デザイン」，パウル・エドワード，ジョー・オマホビー，スティーヴ・ヴィンセント著『批判的実在論を応用した組織研究：その実践ガイド』オクスフォード大学出版（2014）所収，をそのまま利用したものである。）

序

実在論者は次のように考えている。すなわち，組織化された社会生活は疑いもなく複雑なものであるが，それにもかかわらずその社会生活について，研究活動に基づいて確かな記述を展開することは不可能ではないと。とくに，表面的な見かけの底部で働いている重要な社会過程について記述することは可能であるし，またそれとは別にその謎めいた帰結について説明することも可能である。本書の序論となっている章で論じられていたように，こうしたことをするために批判的実在論は認識論的問い（組織や経営はどのように研究されうるか？）よりも前に，むしろ存在論的問い（この領域では，問いそれ自体は次のようになる。すなわち，組織とはいかなるものであり，経営とは何をすることなのか？）を据える。CR［Critical Realism；批判的実在論，のこと。以下同様］[1)] に導かれた研究者にとって，問題はつねに次のようになる。すなわち，利用可能なデータを理解し，また現実に働いているプロセスやメカニズムに焦点を合わせるためには，どのような概念が必要となるのか？と。

そのことが認知されていようといまいと，概念の問題は，研究においてつねに重要である。どんな研究活動であれ，それにとって潜在的に重要となる可能性のある情報を特定し収集するためには，なんらかのアイディアや概念が必要である。そうして見いだされたどんな証拠についても，それにたいして特定の解釈を与えるのに必要なものは，今度もまた，一般性のより高次のレベルにあるアイディアなのである。CR に導かれた研究者は，次のような問いを繰り返し問うことで，こうしたことを実現するという長所をもっている。すなわち，調査対象になっているある社会メカニズムについてより完全に理解し探求するためには，どのような概念が必要となるのか？と。そのような問いに答えるには，概念とデータの両方がともに必要である。一般的にいって，CR に導かれた研究における目標は，利用可能なアイディアと意味のあるデータから，それらを総合して，重要な社会メカニズムとプロセスにおいて何が起こっているのかを説明することである（本書の Greenhalgh も参照）。

ⅰ　スウェーデン　カールシュタット大学
ⅱ　立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

CRに導かれた研究者にとって，［観念的なものである］アイディアという内的世界を観察可能な出来事［events］という外的世界にできるかぎり切れ目なく結びつけるためには，研究方法の役割が本質的なものとなる。しかしながら，このことがどのようにして成し遂げられるかということは明らかではないし，それをどのように進めるべきかということについての確かなルールはほとんどない。結局のところ，次のような指示があるのみである。つまり，研究者は，検討対象となっている領域について自分が展開させようとしている理解が含意している事柄をよく吟味するべきだということ，および，もっと深い洞察を与えてくれそうな今以上のどんな情報があるのかについて考えるべきであるということである。実際，CRの研究者がとる研究方法へのアプローチは，他の研究者たちと比べて，通常は高度にフレキシブルであり順応性がある。他の研究者たちは，ほとんど同じように標準的なやり方で特定の方法を使うことに固執している。たとえば，実証主義者たちは，統計的に分析可能なデータセットを生み出すために，大量のサンプルの回答者たちに質問票を送っている。これに対して，構築主義者たちは，彼らの研究対象とする主体たちによって［ある］出来事に付与された意味を理解するために，エスノグラフィー研究を利用している。CRの研究者はそれとは対照的に，様々な手法――例えば，デプス・インタヴュー［depth interviews］，質問票，直接観察――を，同一の研究プロジェクトにおいても様々な時にあるいは様々な論点において，うまく用いることができるだろう。そこでは，様々な情報源から得た情報をつなぎ合わせることが出来る。このようなアプローチでは，さまざまな研究手法が，主として，研究者の理解をさらに発展させるうえで特に重要であると思われる情報へアクセスをするために使われるのである。それらのさまざまな研究手法は，批判的実在論以外の人々にはそうなっているが，それ自体が最終目的ではないのである。もし，ある研究手法がうまくいかないか，あるいは望むものを探し出すために利用できないなら，その際には，それを成すために何か他のものが使われるだろう。この考え方からすれば，成功する研究というものは，方法論上のルールに従うことではなく，知的な創造性にこそ依っているということである。

折衷主義とCRによる研究の創造性

CRの研究者は，もともと多様な種類のデータに興味を持っている。とりわけ，研究の発端においてはそうである。後に何らかの進展がなされるにつれて，特定のタイプの情報により多くの焦点が当てられ，相対的により大きな関心がもたれるだろう。なぜなら，研究の早い段階においては，因果メカニズムがどのように働いているのかということは言うまでもなく，いかなる因果メカニズムが存在しているのかということも明らかではないからである。この折衷主義と順応能力は，ある者にとっては理解しがたいものである。ある評者たちは，研究への特定のアプローチはそれ自身にとって好ましい種類の方法をそれぞれもつべきであるという信条に固執しているために，彼らは，CR的な研究実践の折衷主義を受け入れず，また認めない。というわけで，CRの研究者はときどき，量的および質的研究を適正に行うことに失敗しているというふうにみられることになる。しかし，事実としては，彼ら［CRの研究者］は研究をオーソドックスな方法ではとらえていないということなのである。実在論者はかなりのところ，研究手法については「どんなことでもする」というアプローチをとっていると描かれても仕方がないかもしれない。ありうるメカニズムについて考えることは，それらのメカニズムの存在とその特徴を示しているかもしれない新しいデータと情報の可能な利用法を開拓する独創的な研究実践に適している。

とはいえ，CRの研究には頻繁に採用される一般的デザインが何もないというのは正しくない。この章で私たちが同定し議論したいと思っているのは，まさにそのような一般的デザインなのである。どん

な研究手法（すなわち，データ収集のための細かな手順）であれ，そのほとんどが活用されうるのだが，研究デザイン（研究の全体的戦略）のレベルでは，いくつかの繰り返し試みられるアプローチがある。それらは，CR の研究者によって習慣的に使われ頻繁に選ばれる傾向がある。CR の研究プロジェクトのための研究デザインには，発見のアブダクション的な論理とリトロダクション的な論理――これは［本書の］序論となっている章で議論された――があり，それらは CR の研究プロジェクトに埋め込まれているものだと私たちは提唱している。このゆえに，実在論的研究は，他の研究デザインとは異なるそれ特有のデザインの使用によって際立っている。［というわけで］私たちは以下で，表２．１［翻訳では本文末尾に記載］で図式的に呈示されている８つの特徴的な研究デザインが存在することを記している。しかし明らかに，CR の研究者にとってはそれらのデザインのうちのいくつかのものだけが，実際に選択されるものであり，いつも頼りにするものなのである。そのなかでも重要なのは，ありふれた事例の研究であり，また比較事例研究である。そういうわけで，事例研究デザインの長所について注意深く検討することが必要となる。この章の次節ではそれを行うことにする。

この章の後半で概説される他の研究デザインは，CR に鼓舞された研究にとっても利用可能なデザインではあるが，［いまのところは］ときどき実践上類似したやり方がされているという程度に過ぎない。私たちがそれらを含めて検討するのは，それらが最近の［CR の研究］実践の典型例を示しているからではなく――そちらはこの章に続く諸章のなかで明確に扱われている――，それらが CR の研究において使うことが出来るような研究デザインを提供しているからである。そしてまたそれらの研究デザインは，それらが進むべき道を示しているという点で，また CR 研究が発展しうる方向性を暗示しているという点で興味深いものである。

事例研究のための事例

事例研究こそが実在論的な研究にとってまさに基礎的デザインであるという主張は，ある読者にとっては意外な考えかもしれない。事例研究にかんする多くの議論においては，とくに実証主義に影響された議論では，そのような［事例研究という］手法が重要な営みであるとは全くみなされていないし，ましてや鍵となるような重要な研究デザインであるなどとは思ってもみないことである（cf. Yin 2008）。そうした議論においては，一般性を代表している事例はほとんどないであろうことが暗示されている。実際のところどの事例が代表的なものであるかは知りえないので，どんな事例も，一般化の基礎としては信頼することができないということになる。その帰結として，事例研究は，――いわば，探査的な研究ないし研究の初発段階において――より厳密な調査のための可能な仮説を生み出すうえでのみかろうじて役に立つに過ぎない，ということになる。しかしこうした考えは，帰納的推論の論理に照らして事例研究を評価することによるのである。とりわけ，こうした立場には一つの問題がある。それは，最も称賛され広く認められた研究プロジェクトのいくつかのものは，事例研究だということである――グールドナー［Gouldner,］（1954），バイノン［Beynon］（1973），ブラウォイ［Burawoy］（1979），ポラート［Pollert］（1981），そしてデルブリッジ［Delbridge］（1998）らの業績を考えてみればよい。これにくわえて，［他にも］数多くの価値ある研究プロジェクトがある。それらは，それ自体が比較事例研究へと拡張される研究プロジェクトであるか，もしくは，様々な人たちにより実施された一連の類似の事例に関する諸発見を比較することによって，議論を行うような研究プロジェクトである。それらの業績が果たしている貢献を理解するためには，私たちは事例研究についての理解をあらためなければならないし，なぜ事例研究がそれほど効果的となりうるのかにつ

いても理解をあらためなければならない。事例というのは，（ある特定の労働グループないしは単一の組織についての事例研究，というふうに）狭くとらえるべきではない。事例とは，もっと広く考えられてよいのである（組織ないしは経営システムの――すなわち，官僚制やテーラー化された工場の，または経済の特定のタイプといった例さえもの――一般的なタイプを調査するというようなことがそうである）。

CR の研究者にとって，研究の一つの目標は，働いている一連の因果作用の経過もしくは因果メカニズムを同定することである。事例研究はそうした因果作用の経過を探査するのに適した手段であり，特定の因果メカニズムが同定され探求されるその文脈を特定するのに好都合なデザインを具えているのである。研究の狙いは，それらが働くときに特定の結果を引き起こすようなその［因果的な］形成過程に光をあてることにある。また，その形成過程は，その全体性のなかでもっともよく認識される，もしくは可能な限り全体性に近いかたちのなかで認識されるのである。この全体的な過程に到達するうえで適用される論理がアブダクション［abduction］である（それは，帰納［induction］ないしは演繹［deduction］に対立するものである）。そうしたプロセスが見出されるときには，同じメカニズムが多くの場所でも作用していると想定する十分な理由があるのであり，そのメカニズムは似たようなしかたで作動しており，また似たような結果がみとめられるところではまさしくどこにおいても作動していると想定されるのである。だから，実在論者にとっては，事例研究とは，あるメカニズムまたはあるプロセスが全体においてもしくは部分において作動していることを同定するためのよい機会を意味しているのである。もちろん現実には，メカニズムは直接的に観察できるものではない。実際には，それらについての理念化された説明が，利用可能な証拠を解釈するために，直観を使って生み出されるのである。私たちの経験的観察から同定されえるのは，ただメカニズムの作用に過ぎないのである。

もうひとつの研究上の問いが，メカニズムの同定から生じてくる。私たちが同定したメカニズムがどのようにして存在するにいたったかという問いについて，私たちは次のような古典的問いを発することによって検討することも出来る。すなわち，私たちがいま同定したメカニズムがまずもって存在するに至るためには，世界はどのようでなければならなかったのかという問いである。このようなリトロダクション的な論理の使用が事例研究の視野を広げることになる。

事例研究や比較事例研究に頼っているから実在論的研究は価値の小さいものであるという考えは，断固として斥けられなければならない。多くの実証主義者たちの見解とは反対に，科学的知識の発展においてしばしば決定的であるのは，統計学的推論ではなく，むしろよく選び抜かれまたよく仕立て上げられた事例研究なのである。とりわけ，生物学，医学，そして社会科学のような応用科学においてはそうである。それらはしばしば，重要なメカニズムについての精密な記述を進めることに依存している。植物や動物のライフサイクルについての研究や病気の病因学などは，ある程度まで，ただ測定された変数間に統計的関連があるということを観察することしかできないでいる。［しかしながら，］それに関連している重要なメカニズムについての認識がないうちは，病気のプロセスが実際にどのように作用しているのかということは明らかにならない。そうした場合には，何の理論的根拠も無い非常に強い統計的連関が，ひとを誤らせることがあるのである。

このようにして，たとえば，マラリアが流行した地域には水があるということが，数十年にもわたって医者を誤らせ，マラリアの原因とコレラの原因との間にはパラレルな関係があると考えさせることになった。この連関のせいで，感染媒体が水の中にあって（たしかにある意味では水も関係はあった），水を摂取することで人々のなかに感染媒体が入っていくのだと推測された（しかしそうではなかったの

だが)。現実には，もうひとつの，そして結局はより有益なものとなる相関関係が注目された。それは，マラリアにかかりやすい所では飛行性の昆虫が発生する確率が高いということである。しかし，これとても決定的な突破口ではなかった。この例では，決定的な観察は，それらの強く確証された連関のどちらについてのものでもなかった。それは，二匹の蚊の消化器官のなかにマラリアの感染媒体（それは罹患した患者の血液からすでに特定されていた）が発見されたことによってもたらされた。この［真の原因の］理解に向けて不可欠なステップは次の二つであった。概して経験的なところでいえば，研究が水よりもむしろ昆虫に焦点を当てたことであり，理論的なところでは，マラリアの伝染メカニズムが人間だけではなく昆虫とも関係があると考えたことである。

ロナルド・ロスの研究がランセット［英国の医学専門誌］に公表された。それこそが二匹の蚊のなかにあったマラリアの感染媒体の同定を基礎としてマラリアの原因という問題を最終的に解決したとされているものである。その研究が妥当なものではないとか，その二匹の蚊は代表的なものではないなどという理由に基づいて，マラリアの真の原因は見つかっていないというようなことは，知られている限りでは誰も主張していない。確かに，その二匹の蚊は，まったくもって代表的なものなどではない。すべてのタイプの蚊（正常タイプの両性の蚊）が［人間を刺した］その刺傷を介して感染媒体を運んでいるわけではない。けれども，このことはマラリアの寄生虫のライフサイクルについての本質的に正しい記述を無効にするものではない。ロスの事例は，そのことすべてを一挙に理解できるものにしたのである。ここで関心を引いたメカニズムは，感染した患者の事例や病原菌の媒体となっている昆虫の事例によって具体化されている部分よりももっと広いものであった。けれども，中心的になっている複雑なメカニズムについての説明なしには，また断片を繋いで総体的なプロセスを理解するという努力なしには，どのようにこの病気が理解されえたのかを想像することは困難である。

実在論的な研究デザインの分類

事例研究は重要である。なぜならそれは，メカニズムが何らかの程度において孤立させられ，そして研究されうる状況を用意し，アブダクション的な論理が十分に発揮されることを可能にするものだからである。事例研究が重要であるのは明らかだが，とはいえよく選び抜かれた事例研究だけが，実在論者によって利用される唯一の研究デザインだというわけではない。ここで私たちは，実在論的研究デザインが次の二つの次元に応じて変化するものと考えてみることは洞察力に満ちたものだということを提案したい。実在論的研究の可能性の射程に関する他のさまざまな記述でも，インテンシヴ［intensive］な研究とエクステンシヴ［extensive］な研究との間を区別することが重要であると絶えず言われてきた。この指摘の意味は，事例研究はインテンシヴになる傾向があるけれども，実在論者は他の方法をも駆使してもっとエクステンシヴに社会現象を研究してもよいということである。この考えにもとづいて，私たちは次のことを示すことでこのアイディアを発展させることにする。すなわち，インテンシヴな研究は生成メカニズムの発見に焦点を当てているという点において際だっているのにたいして，エクステンシヴな研究の方は，メカニズムが作動する際の文脈を見ているのだということである。この区別は，アブダクションを発見の原理的な論理として利用するか，ないしはリトロダクションを発見の原理的な論理として利用するかということにもなる［両者は同じ次元に重なっている］。表２．１では，この次元に応じて，私たちはその可能性を四つに区分している。

二つめの次元は，研究者が彼らの研究主題となる対象から相対的に距離をおいた立場をとるときの，その程度に関係している。私たちはこの次元を，研究者が調査下にある状況に関与することと距離を置

くこととの二分法として扱っている。一方では，ただ状態分析を試みるだけの研究がある。他方では，調査対象となっている現象に対して影響を与えようとも試みるような研究がある。この次元は連続的なものとも考えられるだろう。

以上の結果として，８つの可能なデザインの類型が生じる。この類型は，組織研究や経営研究における実在論的研究の最近の状況をたんに反映しようと狙っているわけではない。また，たんに，CR の研究者が最もよく使う研究デザインに位置づけをあたえて，それについて議論しようということでもない。アイディアとしてはそういうことでもあるけれども，さらにそれを越えて，批判的実在論の哲学とメタ理論を前提とすれば論理的に可能となるだろう研究デザインの射程について検討しようということでもある。これによって，めったに使われることはないが，しかし将来的にはよりポピュラーなものとなっているかもしれない重要ないくつかの研究デザインについて議論することが可能になるのである。

次元Ｉ：インテンシヴな研究とエクステンシヴな研究

この次元は研究の視野と目標に関わるものである。そしてこの次元は，実在論的研究（Sayer 1992; Danermark et al. 2002）では，以前にも何度か使われたものである。これまでは，この次元は，様々な可能性の範囲の程度の問題として考えられてきた。その拡がりの一つの極――インテンシヴな極――においては，研究は深さに焦点化され，研究対象となるある状況がその深さにおいて検討されるものとみなされている。この拡がりの他の極において関心がもたれているのは，集団の広範な諸特性――しばしば母集団全体の諸特性――である。

私たちの説明では，この連続的な拡がりを分割して，４つの特徴的な研究デザインについて検討する。それらは，表２．１において別々に分類されている。それらのデザインを区別しているのは，それらがどの程度までアブダクション的論理もしくはリトロダクション的論理に頼っているのかということである。ある文脈のなかに存在しながら，その文脈とは区別されて存在するメカニズムがアブダクションされるまでは，いかなる説明も満足なものにはならない。このような明瞭で因果的に効果をもった過程について明らかにすることができなくては，CR の研究の成果を科学の本質を構成するものとみなすことは困難である。他方では，いかなるそうしたメカニズムも，特定の文脈の外側に存在していると想像することは難しい。したがって，たとえ最小限の仕方においてではあれ，文脈はメカニズムの産出および再産出に寄与していることになるのである。この点からすると，ある程度までは文脈がメカニズムを形成しているとみることが可能になるが，［しかし］また二つのものが深刻な相互作用的影響なしに交わっているとみることも可能なのである。このことは，メカニズムと文脈がまさに相互作用しているある状況に比定されるかもしれない。そのうえ，文脈はメカニズムの結果を決定的なかたちで形成しているのである。メカニズムの作用を明らかにするようなシンプルな事例研究の場合には，文脈はプロセスにおいては不活性な［メカニズムに環境条件を与える］単なる入れ物であると想定することが可能である。しかしながら，私たちは結果についての説明を，どの程度までそれらが生成プロセスそれ自体の結果なのか，あるいはどの程度までメカニズム［それ自体］と文脈がもつ偶発的諸要素との合算の結果なのか，という点から区別できる。そして最後に，実在論者は次のようなリトロダクション的な研究上の問いを発することができる。つまり，ある特定の生成メカニズムの出現が可能であるためには，その文脈はどのようでなければならなかったのか？と。これははっきりとした説明的課題である。この点を考察することが私たちをエクステンシヴな研究の方向へと向かわせることになる。

次元Ⅱ：距離を置くこと［Detachment］と関わり合うこと［Involvement］

批判的実在論者たちは通常，自分たちの研究主題から完全に距離を置くことは不可能であると想定している。さらにいえば，バスカーの業績（Bhaskar 1978, 1986）以降，そして明示的な批判的実在論の出現（Danermark et al. 2002; Sayer 2000）以降は，次のことが一般的となっている。すなわち，距離を置こうとする試みをあえて放棄して，コミットする立場こそが実在論者にふさわしいということを承認することである。バスカー（Bhaskar 1986）は，社会科学が人間の解放にむけた潜在的な貢献力を発展させるものであることを承認し，またそのことを追求することが必要であると主張している。実在論的社会理論においては，社会的世界は，参加者たちの行為によって生み出され，再構成されている（Archer 1995; Elder-Vass 2010）。すなわち，小さな仕事のチームから多国籍企業にいたるまで，全ての社会集団は，人々がそのなかで日々の活動を行っているときに，その人々によって生み出され，また再生産されていると考えられるのである。したがってその際原理的には，［その人々による］なんらかの介入［intervention］によって，少なくとも何らかの変化をもたらすことが可能なはずである。研究活動も，出来事に影響を与え変化を誘発する潜在力を明らかにもっている。なぜなら，それはまさに社会関係のなかにおける介入なのだから。

しかし，どこにおいても社会的再生産は生じているとはいえ，すでに働いている生成メカニズムのせいで，既成のパターンをすっかり変えるような変化をもたらすことは難しい。集団と組織を生産し再生産している相互作用の結果については，関係している様々な集団がみな同程度にコントロールしているわけではない。いくつかの集団が，他の集団よりもはるかに大きな影響を結果に与えているのである。ほとんどの社会的な役割は，制度――彼らがその一部分であるところの制度――に参加するその［役割の］様式を再生産する以上のことを行うには限られた能力しかもっていない。現に存在している生成メカニズムは，既成のパターンのなかで社会関係を再生産しているのだが，それらの生成メカニズムは多くの参加者たちの理解もコントロールも及ばないところにある。したがって，社会関係や制度を変化させるうえで，研究が重要で持続的な影響力をもつということは実際には難しいことである。とりわけ，大きな集団についてはそうである。あるいは，現存のプロセスに逆らった方向で変化をもたらそうとする場合にはそうである。

しかしながら，距離を置く態度への異議が増えてきている。私たちが議論する［上から］第２番目の４つのデザインは，研究の過程と結果にたいする，参加者のより活発な関与ということと関係している（本書のラーム［Ram］他を参照）。ただデータを解釈するだけの研究プロジェクトは，現存の生成メカニズムの性質とその耐久力を効果的にテストすることはできないだろう。それは，ただそれらのメカニズムが存在している現状を認証し，黙認するだけであろう。そうした研究は，既存のメカニズムを再方向づけし変化させていくうえで，いったい何が可能なのかについてなにも発見することがないであろう。［しかし］研究者たちは，ある状況のもとでは，政策立案者にアドバイスを与えることによって，社会プロセスのなかに間接的に介入することができる（Pawson and Tilley 1997; Byrne 2004）。さらにまた彼らは，集団の力の限界を発見し，また行為を通して変化を引き起こす可能性を発見するために，諸関係や諸制度を変化させようと試みることもできるのである。こうして，この類の仕事の困難さにもかかわらず，CR の研究をいっそう多様に応用した，積極的な関与を行う研究が出現し展開され，さらに発展していくことが期待できるのである。

私たちは，いまやそれぞれのデザインの例について議論していくことにしよう。それぞれの事例のなかで，私たちはその性格について概説し，例を与え，そしてその発見の論理についてコメントする。

距離を置いた研究に関連した実在論的研究デザイン

事例研究デザイン

私たちは，すでに一つの事例に基づいて［書かれた］いくつかの有力な研究モノグラフについて言及した。そしてそれらは明らかに実在論的なものであった。たとえば，グールドナー［Gouldner］（1954），バイノン［Beynon］（1973），ブラウォイ［Burawoy］（1979），そしてポラート［Pollert］（1981）がそうである。しかしながら，初期の多くの事例研究は実在論的研究の例とみなすことのできないものである。たとえば，セルズニック［Selznick］（1949）やブラウ［Blau］（1955）によって企てられた研究は，よく知られたもので，アカデミックな領域における組織研究にとって基礎的なものとして幾人かの人たちには認められている（Reed 1985）し，おそらく組織の諸機能について包括的説明を生み出したものである。しかしながら，こうしたものとは対照的に，事例研究における実在論的なタイプは，創発特性の可能性についてははっきりと自覚的であるが，全体論［holism］を主張したりはしていない。それよりも，実在論的なタイプは，特殊なものでありながら，高度に形成的なものであるような因果プロセスを同定することに集中している（Gouldner 1954）。そうするために，この種のインテンシヴな研究は，特定の生成メカニズムに光を当てるとともに，体系だった文脈を適切に利用する。

実在論的事例研究の価値ある例は，ブラウォイ［Burawoy］（1979）の研究である。それは，シカゴの機械工場についての持続的な観察研究に基づいたものである。ブラウォイは，とりわけ，なぜ彼の［観察している］工業労働者たちが高度な連帯性と闘争精神を発達させないのかということについて説明したいと思った。［そして］彼は，労働者たちがまるでそれがゲームであるかのように自分たちの仕事に従事しているということに気付いた。従業員たちは，監督者とりわけ作業研究のエンジニアとのやりとりのなかで，「うまくやれるのか」という挑戦的な課題に対する応答として，自分たちの労働に向かうのだった。「うまくやること」は，各自の機械仕事に対する報酬としてわずかばかりの増給を獲得することを意味し，したがって同僚よりも高い賃金を獲得することを意味した。エンジニアとの日常的相互作用におけるゲームに類似した性格と歩合制［rate-setters］とが，同僚の労働者たちの間に連帯ではなく競争を作り出しているのであった。諸個人は，高い給料を獲得するために競争し，それが成功したとき彼らはその集団のなかでより高い地位をも得ていた。このような関係性の結果として，労働者と経営者との間の垂直方向の対立は，労働者と労働者との間の水平方向の競争にとってかわられる。これらの競争の存在と，競争が労働者をとりこにするその大きさに着目することによって，ブラウォイは，職場での行動をどのように解釈するべきか，ということに関する議論を変化させた。職場での関係性が，かけひきゲームへの労働者の積極的参加によって，労働者の抵抗にもとづく関係性から経営的管理へと，すなわち「同意の工場」へと変化しうるということを彼は明らかにしたのである。

この例は，社会過程の結果における規則性を説明している。それは，規則的に再生産された社会的パターンを同定しているが，前もって予想されたような形式において再生産されているわけではない。私たちは，管理システムを具えた工場をもっているが，そのシステムは経営者が期待するようなよくしつけられた従順さというものを生み出しているわけでもないし，マルクス主義の理論が予想する階級意識的な抵抗を生み出しているわけでもないのである。実在論的研究は，しばしば組織というものを特徴づけ，それが予測可能な規則性をもって機能する傾向があることを指摘しているが，説明は，人間の相互行為が予想されたような形式とパターンを単純にうけとっているという提案に還元することはできないのである。ブラウォイによって提供された説明は，つぎ

のような特徴をもっている。(a) 様々な動機をもつ様々な集団を巻き込んでいる相互行為において，繰り返し現れてくるパターン［がある］，(b) そのパターンのなかでは，任意裁量的行動のゆえに中心的な役割をはたすものがある，(c) それは，繰り返し現れてくるそのパターンを構成し，再生産し，変化させるものである。人々の事情を知って選択する能力こそが，研究者によって同定されたメカニズムがまさにそのような形をとる理由の主要な部分であり，そして，このことが持続性と変化とを引き起こすのである。結局，それらの説明的記述は特定の文脈において見いだされたものだが，それらはその文脈に特有なものではないのである。ブラウォイ自身はこのような言語［実在論的な言語］を用いたわけではないけれども，その記述は少なくとも二つの点で実在論的なものとして受け取ることができる。第一に，うまくやるということについての労働者の受容に影響を与えた一連の因果的要因が同定されていることである。つまり，集団的なかけひきと苦情［処理］のシステム――それらの構造は労働者に経営者の同輩としての明確な権利を与えている――のことである。第二に，これらの要因は，同じような他の構造とともに，あるものはアクチュアル［actual］なレベルにおいて作用し，あるものは，資本主義という組織のより深くに横たわっているものによって秩序づけられている。この深く横たわっているものを，ブラウォイは剰余価値を確実なものにすると同時に覆い隠すものだと呼んでいる。以前から長年にわたってこの工場がドナルド・ロイ［Donald Roy］によって研究されてきており，したがって時間的な比較が可能であったという事実に助けられているということがあったにせよ，［ブラウォイが研究した］単一の事例が説明的な一般化を提供するものになっている。

研究手法に関してすでに述べたように，CR の研究者たちは経験的に広い範囲をとる傾向がある。生成メカニズムの特性に関する手がかりは，数多くの場面で見つかる。［例えば，］集団成員の態度において，それらのメカニズムが生み出す行為において，そして集団間の相互作用において。行動の持続的な観察を行ってのみ，また特に是認された信念や行為の期待されたパターンからの逸脱に注意を払うことによってのみ，生成メカニズムの精確な性質の認識がはじめて生じてくることになる。こうして，それらの性質への理解がはじめて促進され，またそれらの効果の範囲が理解される。このような理由から，実在論者たちはエスノグラフィーこそがこうした仕事に適した基礎的方法であると主張している（Miles and Huberman 1994; Porter 2000; Reed 2008; 本書の Rees and Gatenby）。とはいえ，研究が進むにつれて，特定の種類のデータに対する関心も高まるかもしれない。たとえばブラウォイは，その研究が進むにつれて，労働者間の競争により多くの関心を寄せるようになって，それらに関するデータを集めた。この章で前に論じたように，知識の前進とともに異なる種類のデータに注意を変化させるということは，実在論的研究の１つの特徴である。

フィールドワークの間，ブラウォイの周りにはたかだか20人ほどの機械工作者がいたに過ぎない。けれども，疑いもなく彼の発見には普遍的重要性があった。大事な点は，事例研究のなかで発見された生成プロセスの記述が，因果連鎖の概念的解釈を含んでいることである。そうした仕事は，組織のプロセスについて新しくそして思いもしていなかったような見方を提供するのである。つまり，それまで広く気づかれていなかったことが，新しい理解の基礎なのである。ひとたびありふれた組織を新しい方法で解釈したならば，旧い見方に戻ることは難しい。それゆえ，うまく実施された実在論的研究は，そのテーマについての，そしてそれがどのように働くのかについての再概念化を含んでいる。生成プロセスの記述が，そのテーマについて，新しく［それまでとは］異なった考え方を打ち立てるという点で，それはダナーマークら（2002）によって定義されたところのアブダクションなのである。(Dubois and Gadde 2002; Easton 2010)

比較事例研究

事例研究は，ひとつの事例に限定されるわけではない。それらの類似性と相違性を比較するために，いくつかの類似しているないしは関連している諸事例を調べることは，過程とその結果を，あるいは生成メカニズムならびに原因とその結果についての結論を，より効果的に描くことを可能にする。

事例研究から正当化可能な一般化を行うことの限界は，経験的な［問題］というよりも，むしろ理論的な［問題］である。他方，所与の状況において生成メカニズムそれ自体がどのように働くかということに関しては，さまざまなバリエーションがあるだろう。比較研究は，メカニズムの性質と，過程および起こりうる結果のバリエーションの範囲の双方を明らかにすることを助ける。鍵となるような重要な結果において意味のあるバリエーションを示しているある範囲の諸事例に注目する研究プログラムをデザインすることによって，そのメカニズムの性格や諸性質についてよく基礎づけられた知識を発展させることが可能である。比較事例的研究デザインについてのひとつの考え方は，その事例の結果がどの程度までメカニズムによるものか，文脈によるものか，またはそれらの相互作用によるものか，について明らかにすることを助けてくれるというものである。［比較する諸事例において］共通するメカニズムが同定されうるところでは，科学的説明へのよりよい近似が達成されるのである。もし，作用しているメカニズムのいくつかの特徴が部分的に同定されたならば，さらに多くのデータの検討を通して，またはより多くの実例の比較を通して，いっそう一般的な知識が索出されるだろう。

暗示的であれ明示的であれ，実在論的原理を踏まえた多くの比較事例研究が存在する（Edwards and Scullion 1982; Burawoy 1985; Delbridge 1998; Taylor and Bain 2005; Kirkpatrick, Ackroyd, and Walker 2004）。［研究対象となる］事例は選択されねばならない。［事例が選択されるのは］，それらが吟味しているメカニズムかまたはその文脈のあるバリエーションを表している，ないしは表していそうだからである。もし，関係している（諸）生成メカニズムに関して何ほどかが既に知られていたならば，比較の作業はより効果的となる。インテンシヴな研究に際しては，結果を形成するという点で文脈よりも生成メカニズムの方がより形成的であることが想定される。しかし，文脈とメカニズムの間の実際の相互作用はしばしばまだ知られていないことであるし，それらの構成要素の相対的寄与［度］を確定することは，［それ自体が］探求の対象の一部となる。何らかの同定されたメカニズムに帰すことのできる因果的重要度の［認識の］精度を上げることが，この［研究］デザインの目的である。

比較の仕事の有益な例は，アメリカ合衆国，英国，そしてハンガリーの工場における労働過程について，ブラウォイ（1985）がおこなった比較である（Burawoy 1985）。比較分析のこの仕事は，調査対象となっている生成メカニズムの一部として，労働過程に着目している。その労働過程は，三つの異なる場所において実質的に類似しているとされているものである。ブラウォイは，彼自身が行ったシカゴに根拠をおいたアライド機械工場についての研究と，ラプトン［Lupton］が行ったイギリスのジェイ・エンジニアリング工場での研究（1963），ハラズチ［Haraszti］が行ったハンガリーのトラクター工場に関する研究（1977）とを比較した。ブラウォイの重要な発見は次のことにある。すなわち，労働過程と工場の管理体制は3つのすべての国において類似性があるにもかかわらず，労働者の経験についてみれば政治的ならびに経済的な文脈が重要であるということである。［つまり3つの事例で，］労働者の経験は実際にはまったく異なっているということがわかったのである。［すなわち，］英国やアメリカ合衆国においてよりも，ハンガリーにおいて工業的な規律がはるかに強かったのである。このことは，工場そのものよりもその外部におけるより広い制度的な諸関係によるものであった（ハンガリーでは，制度的な諸関係のなかに，経営方針の決定への，また労働

市場に対する政治的なコントロールが含まれているのである）。そうした関係が，経営の権力を強めていたのである。ハンガリーにおいてはいかなる失業も無かったにもかかわらず，そこでの労働者は，ブラウォイ自身の研究で見いだされた労働者よりもより厳しい経営的コントロールのもとにあったのである。

比較デザインを自然発生的な実験と見なそうとする誘惑がある。そうした実験では，１つの決定的な側面を除いてはすべてが同じである場合，そうした状況が比較のための事例を提供することになる。そのとき，そうした要因の因果的効果があらわになる。確かに，そうした偶然のバリエーションがあれば，一つの要因の因果的性質を厳格にテストすることを可能にするというのは本当であろう。［だが］不幸なことに，そうした機会はきわめてまれなことであろうし，たいていの比較研究はこのような仕方では実験的デザインの要求を満たさないであろう。比較の作業で利用される事例はいろいろな点で相互に異なっており，それは実験的デザインの近似としては考えられないものである（Siggelkow 2007）。

実在論的な比較研究においては，諸事例の間には多くの点で差異があるということが受け入れられている。演繹的論理が要求するような，１つの決定的な変数を除いてすべてが同じである，というようなことはありえない。それにかわって，示差的な特性をもって働いている生成メカニズムがあって，それが特定の状況下において自らを表出するという議論がある。何がそのメカニズムがそこにあるということを示すのか，どのようにその過程が働くか，は非常に様々である。とはいえ，そのメカニズムを同定するということは，大部分のところ［観察データというよりも］概念的な問題である。それゆえ，実在論的研究者がさまざまなところから直接比較可能なデータを得るチャンスがあるところでさえも，彼らはそうはしないことを選択するかもしれない，ということはべつに驚くことではない。たとえば，彼ら自身の研究プロジェクトにおいて比較分析を企てたエドワード［Edwards］とスキュリオン［Scullion］は，様々な工場にいる労働者の態度について，いつも比較可能な量的尺度を探し求めたり，不正行為の形式に関係のある類似データを探し求めたりしたわけではなかった。この仕事において，評価的な比較はなされてはいるが，演繹的な推論はほとんどなされていない。要するに，このデザインの論理は単一の事例［に基づいた研究の論理］とあまり変わらないのである。研究の目的は，研究対象になっているある現象の性質について私たちが抱いている理解を練り直すことでもある。したがって，そのデザインの論理は，単一の事例の場合と同様に，基本的にはアブダクションなのである（Danermark et al. 2002: 79をもみよ）。

生成的制度調査［Generative Institutional Investigation］

上でみたように，比較事例研究は，――あの制度的文脈のような――文脈に関する一般的研究と結びあわされ，またそれらの文脈によってもたらされる諸結果の比較と結びあわされることができる。ブラウォイの仕事はそうしたことのための素材を含んでいたのだが，同じようにエドワードの仕事もそうした素材を含んでおり，その仕事は，様々な工場の管理体制に関するブラウォイの研究を引きついだものである。エドワードは，資本主義の発展における時間的な経過を，さまざまな工場の管理体制について検討するうえでの別種の文脈として探査した（Edwards 1986）。彼は，経済に生じた変化と集団的抗議の形式との結びつきについて検討した。これは，文脈とメカニズムの相互作用における類似性と相違性を共時的に探し求めること（つまり，ひとつの時点における横断面）から，因果的連鎖を通時的に探すこと（そこでは因果的連鎖は時間の推移のなかで作用するものとみなされる）への転換である。こうした因果関係は，あるユニークな結果を生み出すために生成メカニズムとその文脈とが典型的な仕方で歴史的に結合していたことを示すによって探し出さ

れる。このような研究は，分析的かつ歴史的でなければならないし，そもそもそれが成し遂げられるためには，文書記録データの解釈に，または二次的資料に頼らなければならない。しかし［他方で］この研究は，他の過程も働いているようなある文脈のなかで生起している生成メカニズムに関するアイディアによって導かれている。こうした研究の例においては，運動が生成メカニズムとその文脈との間の特殊な結合における変化というかたちで生じるので，原因と結果の連鎖が時間の推移のなかで働いていることがわかる。

わずかとはいえ，連結した生成過程に関する重要な研究がある。それらは，実在論に鼓舞された研究が発展するにつれ，さらに多くのものが期待されるであろう。エドワードの後年の研究にくわえて，他にも最近の研究を引き合いに出しておこう。Smith（2005; Smith and Meiksins 1995），Clark（2000），Mutch（2007），and Muzio et al.（2008）がこれである。ピーター・クラーク［Peter Clark］（2000）は，諸生成プロセスの間における時間的結合に関するアイディアについておそらくもっとも多く論じている。彼の仕事では，時間的連鎖と結合の議論と地理的なそれとが組み合わされており，それゆえに複雑である。もう１つのエクステンシヴな研究の例は，クリス・スミス［Chris Smith］の仕事である。これは，３つの分析的にはっきりと識別できる生成過程（彼はこれを「システムの」,「社会的な」，そして「支配の」効果だと呼んでいる）について調査し，それら３つすべてが時間の推移のなかで働いているという証拠について検討している。スミスは，企業の最近の戦略と実践を説明するためには，これらの３つのプロセスすべてを参照することが必要であろうということを示している。

マッチ［Mutch］（2007）によって集中的に取り組まれた研究が，このタイプの研究の例証である。（同じ著者が本書の12章を書くために，記録文書の内容分析をしている）。マッチは，19世紀のリバプールにおけるビール醸造所の製品の生産と販売に関する経営の転換について，ある個人事業家の実践に注目している。彼は，19世紀の田舎のビジネスマンであるA. B. ウォーカー［Walker］を，「自律的反省的 autonomous reflexive」（Archer 2003）と呼ばれるパーソナリティ・タイプとして確認している。それは，自分自身の行為を監視する能力とビジネス上の営為とを結合しており，自分のビジネスが成功する見込みについて反対する意見に直面しても辛抱強く己の革新的な行動を維持できる，そうした彼自身の判断力をとても重んじているようなタイプである。幸運な事情もまた彼の立身を助けた。すなわち，［彼が］すでにビール醸造所のオーナー経営者であったということや，すでに早い時期にスコットランドでのビジネスの経験があったことなどである。この経験が，リバプールのパブ経営において新たな取り組みを導入することや，彼の醸造所の利益を小売業にも拡大することの重要性をウォーカーに教えたのである。［それでも，］パブハウスと提携した特約経営という新たな形式をウォーカーが成功裡に導入することを可能にした主な要因は，彼が反省的自律的自己アイデンティティをもっていたことにもよるのだということを，マッチは論じている。そして彼が，小売業へと多角経営の手を成功裡に拡げた最初のビール醸造人のひとりとして出現することを可能にしたのは，この反省的自律的自己アイデンティティなのである。そしてこれが，彼のビジネスの収益性の条件を確かなものとし，イギリスにおける他のビジネスでも採用されコピーされた雛形を用意したのである。この研究は，このジャンルにおける他の研究よりも，その目的の点でより謙虚なものである。けれども，マッチによって描かれた組織発展の過程は，１つの生成メカニズムとして興味深いものである。なぜなら，広く再生産されまた影響力の大きかったビジネス革新の起源を，それは明らかにしているからである。

このデザインは，なじみのある過程とみられているものを再解釈することを可能にするような他の諸研究に頼っているにもかかわらず，研究主題の再概

念化を中心に置いたものではない。このアプローチでは，生成過程が存在するための諸条件に注意が向けられているのである。したがって，この研究では，特定の生成過程に注目するだけでなく，それらの生成過程がさらなる問いのための土台として使われるのである。この仕事が生成メカニズムを特徴づけるということを含んでいる程度によって，［確かに］それはアブダクション的なものになる。しかし，それはまた明らかに，特定の生成メカニズムの創発をもたらす歴史的諸条件とその変化の連鎖についての検討へと及ぶものでもある。それは，諸々の発展がどのようにして丁度よく時間的に相互に連動したがゆえに，他でもなくまさにその一連の結果が歴史的に出現することになったのかということを査定するのである。この種の研究は，メカニズムとその存立条件を生みだした要因について探究するので，その論理においては本質的にリトロダクション的なものでもあることになる。

大規模［large-scale］な量的データセットを利用するデザイン

多くの実在論者が量的データを使用している（Sayer 1992; Danermark et al. 2002; Layder 1998）。しかしそれらの多くの論者が，量的データ［を扱っている研究］のいくつかのものについて，かなり疑わしいものであると考えている。たとえば，ほとんどのCRの研究者にとって，調査［survey］から得た結果は，最大限に注意して検討すべきものである。その理由はいくつかある。第一に，実在論者は態度というものを効果的に測定する可能性について，懐疑的である。態度は本来的に変わりやすいものである。そのうえ，態度は，文脈のなかで表現されるのであり，したがって文脈によって強く左右されることになる。第二に，態度がどのように行動に関係しているかということは複雑であり，予測不可能である。このために実在論者は，ある集団の人々の態度（そして行動に対するそれの関係）を明確に突きとめるために，密着型の観察［close observation］を好む傾向がある。第三に，実在論者は人間行動に対して帰納的な論理を適用する可能性について懐疑的である。［たしかに，それを］適用することは容易なことだが，その論理は［人間行動の］過程を反映していない。その論理は，その過程を査定するためにデザインされたものではあるのだが。実在論者はしばしば，実証主義的な研究実践における，データ収集やインタビューの記録（Pawson 1989），データの処理と分析（Marsh 1982, 1988），そしてそれらの研究実践における非社会的かつ非反省的基礎（Bateson 1984）にまとわりついている問題点をみてとっている。

問題の根源は，社会科学で研究される複雑で開放的なシステムが，量的研究を下支えしている実証主義的な想定によっては適切に概念化されないということにある（Karlsson 2011）。ビルネ［Byrne］（2004）は，母集団に関連する量的データを分析する新たなやり方が提供されるまで，伝統的な方法への批判を続けることだろう。彼は，母集団のデータは，変数の分析をやめて「複数レベルのモデル化［multilevel modeling］」に置き換えることによってのみ適切に分析されうると主張している。この手続きは，調査データの記録における革新を要求しているといえる。それは，回答者たちの個々の回答を記録することに加えて，回答者が所属する集団に関する情報を集めることへ移行することである。調査研究に付随している標準的な研究実践は，すこぶる個人主義的なものなので，データセットの量的モデル化のための理論的により適切な手続きが開発される必要があると主張している点で，ビルネは正しい。ところで，それらの方法がすでに利用可能なもので，組織研究においては広く使われているということを論ずるに先立って，論じるべきいくつかのことがある。

とはいえ，代表的なサンプルないしは母集団全体から収集された量的データは，既知のまたは［その存在が］推定されている生成過程との間の関係づけを可能にするようなしかたで，文脈を露わに示すこ

とができる。もし，ある（または複数の）メカニズムの主要な特性が前提されているとすれば，メカニズムが作用する文脈を表示しているデータを検討することによって，それらのメカニズムに対するさらなる洞察が生まれてくるかもしれない。実在論者によって了承できる量的研究に共通している特徴は，それが母集団全体に対する記述統計学を手に入れることに関心をもっている，ということである。そのような統計学ならば生成メカニズムの文脈を描くものとみなしうる。したがって，所得格差に関する統計学は，雇用主に対して被雇用者の態度や反応がどう変化したかを理解するためには意味があるかもしれない。実在論者にとっては，量的研究は文脈化のための１つの方法であり，また組織過程を再定式化する方法でさえあり得る。母集団の特性を推定するためにさまざまなサンプルを用いることには経済的な価値がある。記述統計学それ自体は，わずかのことしか説明しない。スウェーデン人の母集団のうち64％くらいが，仕事に対して手段的な態度をもっているということを知ることは，［それ自体］１つのことである。けれども，それは多くの他の先進諸国に比べて極端に低い数字であるということ，またこの数字は急速に上昇しつつあるということを知るのも，さらに多くのことを知ることにつながる。まとめると，それらの観察はスウェーデンにおける職場の変容に関して何ほどかのことを語っており，またそれらの観察は関連しているかもしれない過程へのさらなる研究を刺激することになる。

いくつかの大規模な研究プロジェクトのデザインは，母集団についての情報を収集することを含んでいる。その例としては，英国における多国籍企業における雇用活動についての研究（Marginson et al. 1995）がある。そこでは，そうした企業の数が推定されている。母集団のデータを上手く使ったねらいを定めた仕事も可能である。そうした可能性を例証するために，ここでは，この20年間に法律関係の職業がどう変容し再組織化されたかということについてアクロイドとマツィオ［Muzio］によってなされた仕事（Ackroyd and Muzio 2007）を検討しよう。法律事務所は，少数の事務所についてのインテンシヴな研究，とりわけエスノグラフィーを使った単一の事例研究というインテンシヴな研究を通して，ひろく研究されてきた。現代の専門職事務所に関する主要なモデルは，経営化された専門職ビジネス（MPB）［モデル］であったが，それはカナダの法律事務所に関する比較的小規模な研究に起源がある。他の国においても，特定の法律事務所についての研究では，雇われ法律家の労働条件と雇用見通しは悪くなっているとする証拠に光があてられていた。そのいくつかのものは，こうした職業の脱専門職化を示すのだという議論につながっていった。他方，英国やアメリカ合衆国では，非常に大きな事務所や高収益の事務所の出現とともに，事務弁護士［soliciter］の事務所がその量においても重要性においても増大してきていることは明かだと思われた。これらの二つの潮流をつなぐものと考えられる特徴点は，専門職経営の台頭である。MPB モデルの基本特徴は，法律事務所の経営はますます大きくなっている現象であり，それがどうもこの変化のパターンのうちに表れているようだ，ということを示した点にある。しかしながら，イングランドの法律関係の専門職全体に関するデータによって裏付けされた一般的潮流の検討によっては，アクロイドとマツィオは，経営幹部の増加に関するいかなる根拠もほとんど見出すことができなかった。イングランドの事務弁護士事務所に雇われた人々の総数に関する数字から，経営指揮にかかわる社員は確実に減っており，雇われ事務弁護士の数は持続的な上昇にあることが実際に明らかになった。昇級により長い時間がかかることや労働の専門職区分がより複雑になっていることにともなって，専門職のヒエラルキーが大きくなっていたのである。その結果，法律関係の専門職の組織における変容を説明する生成メカニズムについての理解が修正された。今度は，専門職の再組織化というアイディアを中心として構成された事務弁護士事務所についてのオルタナティブなモデルが唱えられる

ことになった（Ackroyd and Muzio 2007）。

生成的な研究［研究デザインの分類表参照］にも，似たような検討があてはまる。このデザインはたんに研究の主題を再概念化することと関係しているだけではない。この研究は，よく研究された状況を設定する。そこでは，既知の生成メカニズムが存在しており，それをその文脈について測定された諸側面に照らして［考察し］，文脈と生成メカニズムという二つのものを比較するのである。このデザインは，知の二つの領域の間にある可能な結合について考察する。したがって，アブダクションとリトロダクションの両方共が関係しているのである。それらのパースペクティブを密接に提携させることは私たちの一般的理解にとって有益である，と考えることは難しいことではない。

関与的研究［ENGAGED RESEARCH］に関連したデザイン

すでにみてきたように，多くの実在論者が社会科学の解放可能性を強調する。もちろん，距離を置く様式の社会研究において生み出された知識も利用され，応用されうる。けれども，通常それらの社会研究は，専門職者とか政策立案者とか社会運動の活動家のような，研究者以外の集団によって応用されているのである。解放的変革にコミットすることを前提とするならば，私たちは批判的実在論の研究者に，彼らが価値ありとみなす方向に向けて変革そのものを積極的に生み出すために，直接的なやり方で彼らのアイディアや知識を使うことを期待してもよいだろう。また実際，彼らの多くがそのようにしているのである。続く節のなかでは，実在論的研究者たちが，活動的に介入する関与の様式を，研究過程の一部として採用している，そのしかたについて検討する。私たちは関与的研究を二つのタイプに区別する。第一のものは，組織や状況に積極的に介入しポジティブな変化を生み出そうと試みる研究である。その例としては，アクション・リサーチ［action research］（そこでは，研究活動は外部のエージェントによって指導され，参加者たちによって支えられる）と「素足の研究［barefoot research］」がある。「素足の研究」においては，研究活動は主として内部の参加者たち自身によって引き受けられる。関与的研究としてここで検討される他のタイプは，評価［evaluation］である。そこでは，現存の政策や変化を生み出そうする試みの有効性が徹底的に評定［assessment］される。

実在論者たちが関与的研究を積極的に引き受けるときには，自分たちが知っているところの，ないしは提供するところの，彼らの研究の場において作動している構造やメカニズムに関する理論的一般化にもとづいて，社会的な実践に影響を与えようと試みるのである。序章で論じたように，理論的一般化こそは実在論的研究の重要な成果である。それらの一般化は次のように定式化される。すなわち「このような構造が見いだされるところではどこでも，この（これらの）メカニズムが，またはこの（これらの）傾向性が働いている」と。しかしながら，特定のメカニズムの存在から，確実に結果が読み取れるというわけではい。社会的世界は開放的なものであり，本章の前節で論じたように，あるメカニズムの結果として何がひきおこされるかということは文脈によって変更されうるのである。ひとつのメカニズムに関する文脈は，他のさまざまなメカニズムを含んでいる。社会的行為および社会計画のためのアイディアは，変わりゆく文脈を考慮に入れることを試みなければならない。そうした理由から，実在論者は変革のための処方箋を書いたりしないという傾向があるし，良い社会的結果をもたらすためのレシピを提案することもしない。そうするには，あまりに多くのことが未知であり偶発的なのである。そのかわりに彼らは，実践家たちに対して，彼らが特定の文脈に適用できるような構造やメカニズム，傾向性についての知識を提供する。実証主義者の実践家に対するアドバイスは，文脈とは無関係に「もしあなたがAをするならば，Bがひきおこされるだろう」と述

べる経験的一般化にもとづいたレシピとして定式化されている。実在論者のアドバイスは［それよりも］はるかに複雑ではあるが，変革を扱ううえではより実践的でもある。それは，たとえばこういうことでありうる。（Pawson 2006: 100）

> 「Aを忘れないように」，「Bに用心しろ」，「Cに注意したまえ」，「DはEという結果にもFという結果にも終わりうる」，「GたちとHたちはIについて全く異なった解釈をしそうである」，「もし君がJを試みるなら，K，L，そしてMが考慮されたかどうかも確認しておけ」，「Nの効果は短期的なものになる傾向がある」，「Oは実際には，非常に多様な構成要素――P，Q，そしてR――を含んでいる」，「SはTにおいてはうまくいくが，Uのためにはあまりうまくいかない」，……「V，W，X，Y，Zに関しては，ほとんどのことが知られていない」。

生成メカニズムについて，またメカニズムと文脈との間の関係についてわかっていることを考慮に入れる必要性を背景にして，関与的な実在論的研究は――それが企てられたときには――予測可能性からはほど遠いか，または，［それは］容易なことではない。それゆえ，この様式のデザインについて私たちが論ずることは，暫定的なものであり，試験的なものである。関与的研究は，いくつかの形をとって長い歴史がある。しかし，それらの領域では実在論者は蚊帳の外にいる。距離を置いた実在論的研究と比べれば，その重要性が増してきているにもかかわらず，関与的な様式の研究はまだ稀である。実在論的なものであれ他のものであれ，このタイプの研究の多くが，研究雑誌や本のなかでは報告されないという傾向がある。成果の公表が最終目標になるのとは違って，［社会的な］活動は遂行し続けるものであり，活動することが主眼になっているからである。

アクション・リサーチ［Action research］

アクション・リサーチは，関与的研究プロジェクトのなかでは，もっともよく知られたタイプである。そこでは，研究者は，研究対象となっている集団の行動および実践に変化をもたらそうと努める。その手続きは，ふつうはある作業グループと関わりをもち，しばしば外部の「コンサルタント」の助けをかりてなされる。コンサルタントは，そのグループ自身の行動パターンについての診断を定式化し，変革を生み出すために何をする必要があるかを決め，こうして変化に取り組む。このデザインは，研究が事前に計画された方向性にむけて重要な変化を引き起こそうとする試みを含むような，事例研究のもう一つのタイプと考えることができる。アクション・リサーチは，好都合な状況のもとにある小集団においては変化を引き起こすことが可能であるということを，経験が示している。しかし，その職場のなかですでに働いている生成メカニズムに打ち勝つということは，簡単にできることではない。たとえば，職場の解放的変革の可能性に対抗して働いている力はかなりのものなのである。

伝統的な研究者は，意義のある変革などというものは，不可能ではないにしろ（実在論者にとって），あるいは望ましいものではないはないにしろ（実証主義者にとって），いずれにしても，難しいものであると信じている。それゆえ，アクション・リサーチと「伝統的」なアカデミックな研究が併存しているところでは，しばしばそれらの間に緊張がある。アクション・リサーチの実践家たちの間には，ほとんどいたるところで「主流」の社会科学にたいする軽蔑が見受けられる（Gustavsen 2004: 154）。アクション・リサーチの研究者たちはアカデミックな研究者たちを象牙の塔の住人であるというかどで非難している。これにたいして，アカデミックな研究者は，アクション・リサーチに携わっている人たちがやっていることを，知的重厚さに欠けるものと見なしている。しかし私たちの考えからすれば，主流の研究とアクション・リサーチとの間の区別が重要なのではなく，それら両方のタイプの研究のなかの実在論的アプローチと反実在論的アプローチとの間の

区別こそが重要なのである。ほとんどの研究が，実証主義的存在論ないしは構築主義的存在論の影響を色濃く受けている。しかし，そこにはいくらかの実在論的な流れも存在する。（Ram 他によって書かれた本書の第11章には，批判的実在論的アクション・リサーチの優れた記述がみられる）。

評価研究［evaluation research］について語りうる（次節をみよ）のと同程度に明確な批判的実在論的タイプのアクション・リサーチについて語ることができるとは，今のところ私たちは考えていない。けれども，研究者が実践家に処方箋を提示するのではなく，理論的な知識により多く依拠するような事例なら存在している。［とりわけ，］ノルウェーのアクション・リサーチの例は，［処方箋を提示することと，理論的な知識を提示することとの］違いを例証している（Rolfsen and Knutstad 2007）。そのプロジェクトは，自動車を供給するある会社で行われた。その会社は，まさに大規模自動車生産者とのあいだで契約を結ぶことに成功したところだった。その生産者はより進んだ技術的変革を，すなわちリーン生産戦略の導入と作業チームの組織化の実行，を要求していた。［そこに］２人の外部からやってきたアクション・リサーチ研究者が加わって，最高経営レベルでも，そして作業場でも活動的に携わった。［しかし，］研究者の抗議にもかかわらず，経営陣はリーン生産のアイディアにもとづいて変革プロセスのための処方箋を書いた。最終的には，従業員はガイドラインで取り決められた変更に従うだろうという見込みを経営陣は強調した。

研究者は，この処方箋は機能しないであろう，とくに最後の点［従業員が従うという点］において機能しないであろうということを主張した。しかし，それでもやはり経営陣はチーム［の組織化］を実行に移し，チームリーダーを任命した。実際には，それらのチーム［の組織化］には多くの問題点があった。たとえば，鉄工所チームでは，熟練工は高い自治性［で仕事すること］に慣れていたのである。しかし，そのアクション・リサーチ研究者たちは，リーン生産の処方箋を実行に移すことを試みる代わりに，一連のチーム・ミーティングを準備した。そこで，あるメンバーたちは，チームがどのような目標をもつべきかについて議論した。研究者による理論的アドバイスに支えられて，チームメンバーは作業グループが共有の目標をもった協同ユニットになるという改革プランに到達した。そして，そのユニットで仕事のプロセスに関する知識を共有し，またついにはチームリーダーなしの自治的ユニットにまで発展した。［一方，］組み立てラインのチームは未熟練労働者たちであった。しかし，彼らも一定の限界内においてではあるが，ある程度の自治性をもつことに慣れていた。いまや，彼らは新たなスキルを学習しなければならなかった。そして多くの者が，彼らがそれをするだけの能力をもっていることに疑問を持っていた。このチームにおいては研究者による理論的助力があったが，メンバーたちはチームが学習の舞台として組織されるべきであると決定した。それはつまり，誰もが馬鹿者だと見なされることなくどのような質問でも聞くことができるということを意味した。そして，彼らは自分たちの間で学習課題を分かち合った。研究者の結論によれば（p. 352），「そのチームは，自分たち自身が学習することに対して責任をもつことを強く望んだのである」。

実在論的アクション・リサーチにおける発見の論理では，［その］作業グループが巻き込まれている生成メカニズムを再構築する可能性について考えることになる。つまりこれは，メカニズムに関してすでに生起していることを同定し，集合的努力によってそれを再設計するということを意味するのである。積極的な介入は研究プロセスの一部なのである。リーン生産のガイドラインに沿って人々を労働させるというレシピは，これとほとんど違わないかも知れない。しかしこの事例においては，チームに概念的議論をもちこんだ研究者によって，その目標が効果的に置き換えられたのである。批判的実在論的な用語を使って言えば，そのチームが始めたことは，チームがそのチームの構造に持たせたいと願うメカニ

ズムがいったい何であるのかを調査し評価することであった。そして，それにしたがってそのチームは秩序づけられたのである。［上記の］二つのチームは，それぞれの文脈に適合するような異なる構造を築き上げたのである。というわけで，距離を置いた様式と関与的な様式との差異は，文脈に関するものではない。それらの事例の両方において，文脈は所与のものであったのである。そうではなくて，関連するメカニズムを扱うやり方に差異があるのである。距離を置いた様式においては，問いは次のようになる。つまり，この文脈においてメカニズムは何であるか？これにたいして関与的な様式においては，次の問いになる。つまり，この文脈に私たちが組み入れたいと願うメカニズムは何か？この新たな形成的メカニズム［を構想すること］がアブダクションなのである。しかしそれは，研究者によってなされるものではなくて，参加者によってなされるアブダクションである。このアクション・リサーチにおける批判的実在論の特性は，新たなメカニズムを創造することに帰結する。しかしそれは，諸々の文脈に同一の処方箋を導入することでなされるのではない。

インテンシヴな実在論的評価

変革のプログラムは，ある問題のある社会現象をよりよいものに転換させるための政治的な戦略プランである。そして，評価は，そのようなプランを実際の結果と比較して行われる。実証主義に鼓舞された，また方法に導かれた実験ならびに疑似実験的な評価が一般的であるが，たとえば，健康科学［health care］（Marchal et al. 2012）やソーシャル・ワーク分野（Kazi et al. 2002）のプログラムでは，理論に導かれた実在論的な評価がその重要性を増してきている。

疑似実験的な研究デザインは，私たちが以前のいくつかの節で問題だとして警告したように，文脈を無視した改革の処方箋をあてがうことに関連したさまざまな問題をもたらす。批判的実在論の代替案は，介入の複雑性［の問題］を真剣に取り上げたうえで，「どのような状況に置かれた誰にたいして何が有効に働くのか？」という問いをたてる。そのプログラムがもたらす結果を生み出している文脈とメカニズムとの間の相互作用こそが，研究されているのである。それは，文脈−メカニズム−結果編成体（CMO）［the context-mechanism-outcome configuration］と呼ばれている。ポウソン［Powson］とティリー［Tilly］が言うように，「因果的な結果は，文脈のなかで活動するメカニズムから帰結する」（1997: 58）。そこには，介入が有効に働くかどうかと問うことから，介入が有効に働くようにするものは何かという問いへの移行がある。したがって，批判的実在論的な評価は，理論に導かれており，理論的な一般化を生み出す。プログラムと介入が有効に働くのはメカニズムによってであり，実在論の評価が出発するのはこの点である。グリーンハーフ［Greenhalgh］は本書で，これらの基礎的なアイディアを展開している。

介入がなされるときには，その介入は，既に存在している社会的文脈に対してなされる。また，結果にかんする説明がみいだされるのは，それらを駆動させるメカニズムと文脈との関係においてである。すでにみたように，異なる文脈では，同じメカニズムが異なる結果をもたらす（あるいは全くもたらさない）ことがある。文脈は，メカニズムの効果を可能にしたり抑制したりできる。もちろん，そのことが，プログラムの成功または不成功を生み出すのである。介入は，問題を生じさせている現に存在するメカニズムに向けてなされ，問題のメカニズムを抑えることができるようなメカニズムを組み入れようと試みるのである。というわけで，批判的実在論の評価が調べようとしているのは，そのような CMO 編成体の諸効果である。

以下の例は，実践家たちに，処方箋を書いてあげるのではなくて，複雑な概念的な知識と理論的一般化を提供するための諸原則を説明している。それは，インターネットを使った医療教育のインテンシヴな評価［の例］である（Wong et al. 2010）。この例は，

この分野の実際の研究に基づいている（cf. Powson 2006）。実証主義の方向に沿った初期のメタ分析は，インターネットが医療系の学生の教育にしばしば使用されていることを見いだしたうえで，平均的にみて，インターネット教育は重要な点で非インターネット教育と同等だということを見いだしていた。しかしながら，似たような準備［科目］に対してどのように反応するかという点において，実質的には差異があり，それを理解するのが難しかった。［すなわち］技術ベースの教育科目について，あるグループでは肯定的に評価され，他のグループでは否定的に評価されることがありえたのである。しかし，批判的実在論の評価者は，この差異を彼ら［評価者］の出発点の違いとして受け止めた。［この研究によれば］彼らの最初の目的には，（a）どのような種類のインターネットベースの医療教育が，誰に対して，またどのような条件のもとで「有効に働く」のかを説明しようとするもの，（b）科目デザインを最適化しようとしている開発者によって使用できる実際的なガイドラインを作成しようとするもの，あるいは特定の科目が潜在的な学習者にとってよいものかどうかを彼らによって評価しようとするものであった（Wong et al. 2010: 2）。［この研究では］精緻な調査と選別過程を経た後に，インターネットベースの医療教育のうちの249の学習が評価対象として選ばれ，一定数の有力候補となる理論が（a）についての説明として選ばれた。こうして，それらの理論は，すべての関連する研究から得られたデータにてらしてテストされた。そしていくつかは修正されたし，いくつかは除外され，もっと多くの理論が付加された。

さまざまな文脈におけるメカニズムとその結果についてのこの理論探査の過程を経て，２つのタイプの理論が説明候補として選ばれることになった。１つは技術の受け入れを扱うものである。ここでは，評価者をして，処方箋ではなく，一連の問いを定式化するように促す。それらの問いは，科目の開発者ならびに想定される受講者が，彼らの行為のためのガイドとして問うかもしれないものである（p. 5）。それらのなかには，想定される学習者がインターネット技術をどれほど有用だと感じるか，また想定される学習者がその技術をどれほど使いやすいものとみなすか，さらに，学習者が慣れ親しんでいて期待するものという点で，そのフォーマットがどれほどうまく適合しているか，という問いが含まれている。もう１つの理論は，中心的なメカニズムとしての双方向的な対話に関心を寄せている。これは，実践家たちに，次のような二つの追加的な問いを考慮するようにうながす。すなわち，どのようにして，質の高い人間対人間の（学習者とチューターとの，および学習者同士の）相互行為とフィードバックを達成しうるか，また，どのようにして人間と技術との間の質の高い相互作用とフィードバックが達成されるのか，というものである。

この研究には，アブダクションの重要な諸要素がある。その基礎的なものとしては，ヴァーチャルな学習空間という新しい文脈において効果的な学習を促進する有効な相互行為の性質にかんする理論的な推測である。実在論的な評価は，それ以前の実証主義的なメタ分析の結果に依拠してなされ，その結果が拡張される。それは，医療のインターネット教育に関心をもっている人々に文脈を無視して適用されるべき処方箋を提供したりはしない。しかし，それは，異なる文脈に置かれた様々なグループにたいして，または同じ文脈のもとにおかれた異なるグループにたいして，行動のためのガイドについて考察するような問いを提供するのである。

素足の研究［Barefoot Research：現場からの当事者自身による研究］

素足の研究は，被雇用者たちをして自分自身の境遇について研究するように励ますような種類の研究である。つまり，彼らの会社や産業について彼ら自身の視点から調べ彼ら自身の結論を導き出すものである。このアプローチのアカデミックな主唱者の一人であるカール・ライアント［Carl Ryant］がビジネスの歴史記述におけるオーラル・ヒストリーの役

割について論じるとき（1988），それがほとんど存在しないことに気づいた。この点を正す一つのやり方は，彼が言うには（p. 654），「ある産業史をその労働者の歴史として見て，自分たち自身の職場の歴史を労働者が記述するようにさせること」である。これは，実践家たちとともに研究者たちによって取り組まれる研究という意味における古典的なアクション・リサーチではないし，インテンシヴな実在論的評価におけるように，研究者が教師として登場することもない。そうではなく，このようなアプローチは「素足の［Barefoot な］」研究と呼ばれてきた。なぜなら，それは，ほとんどなんの援助もなく取り組まれる一種の旅だからである。私たちは，この研究のアイディアについて，［当事者］自身の環境のもとでなされるアカデミックな訓練を受けていない人々が行う研究，という定義を提案する。もし，これが一つの研究デザインであるとすれば，それはこの用語の最小限の意味でそのように言えるものである。

素足の研究は，イギリスでは，ヒストリー・ワークショップ［history workshop］という名称で呼ばれていた。しかし，ライアントが原理的に念頭に置いているものは，スウェーデンの「自分の足下を掘れ−運動［Dig-where-you-stand-movement］」である（Lindqvist 1978, 1979）。リンドヴィストが主張するには，ビジネスの歴史は，これまでは所有者か管理者たちのために書かれ，会社の代表者たちによって選ばれて支払いを受ける研究者や著者たちによって書かれてきたのであり，彼ら［経営者たち］によって認可されるものであった。入手可能なスウェーデンのセメント会社のすべての社史を読んで，リンドヴィストは，それらのメッセージは次のようなものであると要約している（1979: 24）。すなわち，経営においては，１つのミスもおかしたことはなかったし，道徳的にみてもけっして誤りをおかすことはなかったと。株主のセメント生産にたいする資本提供者としての貢献は，労働者たちのそれよりももっとずっと重要なものだったということが背景的な前提となっている。これに対して，労働者の貢献については，時に非現実的な要求をしたことはあっても，基本的に会社からその利益を受け取ってきたはずであると。

これに対抗して，リンドヴィストは，ビジネスの歴史は，労働者自身によって書かれるべきであり，その最良の出発点は，彼ら自身の職場である，と主張している。彼は労働者自身が自分の労働生活について研究するようにと，言い換えれば，彼が立っている足下を掘るようにと，労働者のために，一冊のハンドブックを書いた。リンドヴィストは，このような研究が産業の発展についてのオルタナティブな記述を発掘するだろうと，また彼らがその歴史について書く（書き直す）作業に取り組むことで，被雇用者のなかに態度の変化をもたらすだろうという高い期待をもっているのである。１つの説明として，リンドヴィストは，スウェーデンのセメント産業における静電気集塵機にかかわってなされたその使用の制限について考察している。健康被害を軽減する上でのこの技術の効果にもかかわらず，実際にはその導入が遅れたのである。静電気集塵機の原理は，1884年に英国で発見されたのだが，隣接地の所有者たちの強い圧力のもとで，最初の集塵機は1906年（カリフォルニア）まで導入されなかった。1909年に，セメント粉塵がそれに触れることになった者に対して深刻な健康被害をもたらすことが統計的に示された。健康問題と集塵機のかたちをとった解決法の双方が，まもなくスウェーデンのセメント産業ではよく知られたものとなった。しかし，1969年まで，すべてのスウェーデンの会社がその技術を導入するに至らなかった。リンドヴィストは，この技術転換を受け入れることの怠慢についての情報を収集してみてわかることは，労働者の健康にかかる費用を節約することからくる怠慢であり，このことが，被雇用者の考えをラディカルにすることになった，とコメントしている（1979: 29）。

資本と労働の間の関係という抽象的な観念が，特

定の職場の特定の状況にかんする歴史的な調査を通じて，突然具体的で明確なものになり，ほとんど触知できる新鮮なものになるのである。

非プロ研究者向けのハンドブックで，リンドヴィストは，職業的研究者が労働者自身よりも労働者の仕事についてより専門的に優れているなどということはないということを前提にして，仕事と職場を研究する30のやり方について論じている。

当然ながら，素足の研究において採用される発見の論理が何であるかをあらかじめ特定することはきわめて困難である。しかし，このタイプの研究はインテンシヴ／エクステンシヴという軸ではエクステンシヴな極にむかう方向に位置づけられる。なぜなら，少なくともはじめは，労働者の会社と産業についての背景的な情報はエクステンシヴ［なやり方］によって探し求められたものだろうからである。足下を掘れの運動では，被雇用者たちは，彼らの労働者としての経験に関する文脈についてより多くのものを発見しようとする。彼らは自分たち自身の労働経験については深く知っているけれども，その文脈に関しては相対的に無知である。彼らの最初の選択はしばしば，彼らの労働を可能にしたものはなんだったのかと問うことで反省的（retroductively）に考えることである。

リンドヴィストは，最小限のアドバイス（どの資料館，図書館，歴史的統計のコレクション，等々が利用可能か）が，この種の研究を発展させるために必要とされるすべてであろうと主張している。しかし，もちろん，歴史的で文脈的な情報を集めようとするどの程度の関心があれば，理論についての議論にいたるのか，また歴史におけるありうべき因果的な過程についての考察に至るのか，については知られていない。しかし，彼のスウェーデンのセメント産業の例では，労働者の問いは事実の収集から自然に理論的分析に至っている。リンドヴィストは，［事実に関する］発見は，何の困難もなく，資本主義と賃労働についての理論的な社会－経済的な視点のなかに位置づけられると主張している。したがって，彼はここで，アブダクションとリトロダクションの両方が活用されると示唆していることになる。

エクステンシヴな実在論的評価

すでにみたように，もし統計的手法が因果関係を推論するために使われるということならば，多くの実在論者は，統計的手法とりわけ帰納的手法に対しては懐疑的である。この理由から，実在論者による評価は，通常はインテンシヴにデザインされた事例研究の形式で行われてきた。そのような事例研究では，実際，社会システムの開放性［openness］という存在論的主張と，そこから導き出される認識論的要求とに依拠していた。しかしいまや，幾人かの実在論者たちは変革のプログラムについての評価においてそうした［統計的］手法を利用している。したがってそれは，先の軸におけるエクステンシヴな極にむかうことになる。

私たちは，エクステンシヴな実在論的評価の例を，シールド［Shield］と呼ばれるあるプロジェクト組織の経験からとりだすことにする。シールドでは，他者を性的に傷つけた子供たちのためのプログラムを，非営利組織と地方の社会サービス局が協同して行っている。この例においては，評価者は質的方法と量的方法およびインテンシヴなデザインとエクステンシヴなデザインとを組み合わせていた（Kazi 2003：第 6 章から第 8 章）。エクステンシヴなデザインは，それがこの研究のインテンシヴな部分によってもたらされた成果に頼ることができたから可能であったに過ぎない。この実在論的評価についてのカジ［Kazi］の記述は，測定と統計的手法に関して部分的には高度に技術的なものである。しかし，私たちはこれについて議論することは割愛して，この種の評価の基底にある原理［について議論することに］集中しよう。この研究においては，それぞれの子供がひとつの事例と見なされ，時間的推移のなかで長期的に追跡された。したがって，共時的分析と通時的分析の両方が可能になっていた。ここで，私

たちは評価についてのエクステンシヴな部分を検討するなかで，後者［通時的分析］に焦点を当てることにする。インテンシヴなデザインとエクステンシヴなデザインの組み合わせということについては，本書でスコット・ハーレル［Scott Hurrell］が詳細に論じている。

この分野の以前の研究では，他者を性的に暴行した子供たちにとってのリスク要因を同定しようと試みられてきた。シールド・プロジェクトは，このプログラムにおける子供たちがそうしたタイプの罪を再び犯す可能性を減らす方途を見つけることを狙いとした。その手続きのなかには，どのようなタイプの若者にどのような介入が有効に作用するのかに関するいまやよく知られている実在論的な指示が含まれていた。このプロジェクトにおいては，実践家たちがその評価の理論的基礎について議論し学習するという点で，また評価のためのデータを記録するという点でも，その評価にはアクション・リサーチ的な要素があった。以前の実証主義的な研究ではメタ分析と評価が含まれており，そうした研究は性的に他者を傷つけた子供たちに影響を与えた要因について，要領をえずまた矛盾をはらんだ結論を出していることを，評価者は見出した。この例においては，狙いは犯罪行動の再生産に関係しているメカニズムの説明を打ち立てることにあった。

評価のインテンシヴな部分で，多くの文脈や内容，結果，そしてメカニズムがプログラムのなかのそれぞれの子供ごとに同定された。エクステンシヴな分析の最初の段階は，文脈やメカニズム，結果についてインテンシヴな位相から得たデータを集積することであった。そして，その事例で働いているCMO編成体のありうべき形相について検討することであった。その後，それらのCMO編成体の諸要素間の関係性が，量的方法の助けを借りて研究された。エクステンシヴな分析においては，CMO編成体のなかの諸変数間の相関関係が，有意検定や効果量の測定，統計的検定力を通して測定される。その［評価の］パターンのなかには，介入が成し遂げられるかどうかは，子供たちの取り組みと関係づけられるということ，子供の取り組みはまた両親の取り組みと関係づけられるということ，が含まれている。結果にとっては，三つのメカニズムがとくに重要であった。すなわち，両親たちの相互連携，子供がその評定［assessment］に従事する能力，他の専門家との協力関係における改善，である。

エクステンシヴな研究の最終段階は，結果を産出しているメカニズムと文脈との間の相互作用を測量するために，回帰分析を利用することであった。その最重要な成果は以下のようなものである。つまり，家族のトラウマとりわけDVという文脈において問題のメカニズムを封じ込めるために，プログラムのメカニズムがそのきっかけを与えていることである。そして［明らかになったことは］，親がそのプロジェクトに参加している場合には，子供がそのプロジェクトに参加する可能性ははるかに高くなるということである。これは，子供の社会的文脈における他のメカニズムが機能していない場合ですらそうなのである。

もし上記の［プログラムの］遂行が実証主義的評価［の形式］をとったならば，クライエントを取り巻く環境と介入という要素との諸関係は，統制――それが可能である限り――されるべき変数にとどまっていた一方で，研究作業の焦点は統制［変数］グループよりも介入［変数］グループの方が事を上手く運んだ［作用した］のか否かということ［の実証主義的判断］になっていたであろう。シールドのプロジェクトの実在論的評価においては，さまざまな文脈のもとにある子供たちにどのような結果がもたらされるかを理解するうえで，働いていると前提されていたメカニズムこそが中心的な［焦点］であった。実践家に対する［実在論的］なアドバイスは，［文脈を無視して］何が上手くいき，何が上手くいかないかについて述べる処方箋を出すかわりに，もっと微妙な差異を考慮しているので，［より］有益なものである。

シールド・モデルの評定は，もっとも困難な状況のなかにあってすら，他の専門家たちだけでなく，子供・若者や両親との関わり合いに，焦点をあてることで開発されることができた。しかしながら，そうした状況に関して言えば，そこには多くの選択の余地があるようにみえる。第一に，シールド・プロジェクトの評定モデルは，上で強調したような複合的な問題――たとえば，トラウマの前史――が存在しているようなクライエントをターゲットとしたものであった。第二に，そのモデルは，そうした諸条件［複合的な問題］が現れていない他の人々ともよく関わり合うことができるような方法で開発されている。第三に，以下の２つの戦略の双方に従うことができた。つまり，最も困難な状況にある人々をターゲットにすると同時に，そうした複雑な歴史的問題を抱えていないように見える人々にも関与するような方法を開発することである。（Kazi 2003: 156）

多くの批判的実在論者にとっては，記述統計学を越えて推定統計学の使用にまで進むこの種のエクステンシヴな分析は，論争の余地があるものである。けれども，介入のための文脈の特性を調べるためにここでエクステンシヴな分析が実施されたように，実在論的研究者がエクステンシヴな分析に反対する理由は，ほとんどないように思える。

結び

組織研究や経営研究への実在論の応用可能性は明らかであるし，その支持者たちは増大しつつある。しかし，方法論の領域では，実在論的実践家は確かに遅れをとっている。新しい潮流を方法論的アイディアに仕立て上げるためには，CR に鼓舞された方法論は，興味深く洞察に満ちた研究を成し遂げる途上にあり，まだそのための魅力的でアクセス可能な資料がひどく欠けている。願わくは，本書の残りの部分で挙げられている諸々の例が，この点において寄与することを，そして読者がこれを受け入れてくれることを希望したい。おそらく，今［私たちが行った］地図化の作業のもっとも重要な成果は，そしてまさに［これに］続く諸論を集積することによる成果は，多くのタイプの研究プロジェクトが可能であり，そしていかにそれらが活用されていないかということを明らかにしていることにある。この未活用の領域は，研究者が新しい手続きを開発するための大きな可能性を提供している。

これまでは，直接的にも間接的にも，実証主義的アイディアが社会科学の研究方法論の領域で支配的であった。組織研究や経営研究［の分野］も例外ではない。それらのアイディアは，堅固な支配力をもっているので，多くの洞察に満ちた面白い研究――CR の援助のもとに行われた研究のような――が，しばしば前進を阻まれるほどである。客観的知識を産出することに限定された能力をもつ実証主義的パラダイムにとってかわることが，進歩と見なされることは困難である。他方，実在論的研究のプロトコルを発展させる必要を内包する挑戦が，刺激的でわくわくすることだと見なされないこともまた困難なのである。本章の貢献としては，実在論に傾倒した研究者が使うべき価値ある研究手続きがあるということ，そしてそれらの手続きには明確な理論的根拠があり，それによって洞察に満ちた研究を企てることが可能になるということ，以上の認識を促進したことにある。

※この論文は，産業社会学部50周年記念特集の一環として，佐藤春吉教授が翻訳を監修した。

注

１）［…］は訳者による補足。以下同様。

参考文献

Ackroyd, S. and Muzio, D. (2007). 'The Reconstructed Professional Firm: Explaining Change in English Legal Practices,' *Organization Studies,* vol. 28: 729-747.

Archer, M. S. (1995). *Realist social theory: The*

表２．１　実在論に鼓舞された研究にとって意義ある８つの研究デザイン

	示差的な研究戦略			
	インテンシヴ ←→ エクステンシヴ			
	何がメカニズムか？（コンテクストは所与）	コンテクストとメカニズムがどのように：典型的に相互作用するのか？	歴史的に相互作用するのか？	何がコンテクストか？（指定されたメカニズム）
研究手続き				
距離を置いた研究	事例研究 (1)	比較事例分析 (2)	生成的制度分析 (3)	研究調査とセンサスデータ(4)
関与的研究	アクションリサーチ(5)	インテンシヴな実在論的評価(6)	素足の歴史的研究 (7)	エクステンシヴな実在論的評価(8)
主要な発見の論理	アブダクション	アブダクション	アブダクション／リトロダクション	アブダクション／リトロダクション

*morphogenetic approach.*Cambridge: Cambridge University Press.

Archer, M. S. (2003). *Structure, Agency and the Internal Conversation*. Cambridge: Cambridge University Press.

——— (2007). *Making our way through the world: Human reflexivity and social mobility.* Cambridge: Cambridge University Press.

Bateson, N. (1984). *Data construction in social surveys.* London: Allen & Unwin.

Beynon, H. (1973). *Working For Ford.* Harmondsworth: Penguin.

Bhaskar, R. (1978). *A Realist Theory of Science* (2nd edn). Brighton: Harvester Press.

——— (1986). *Scientific Realism and Human Emancipation.* London: Verso.

Blau, P. (1955). *The Dynamics of Bureaucracy.* Chicago: University of Chicago Press.

Burawoy, M. (1979). *Manufacturing Consent.* Chicago, IL: Chicago University Press.

——— (1985). *The Politics of Production: Factory Regimes under Capitalism and Socialism.* London: Verso

Byrne, D. (2002[2004]). *Interpreting Quantitative Data.* London: Sage.

Clark, P. (2000). *Organisations in Action: Competition between Contexts.* London: Routledge.

Danermark, B., Ekström, M., Jakobsen, L. and Karlsson, J. C. et al. (2002). *Explaining Society, Critical Realism in Social Sciences,* London: Routledge

Delbridge, R. (1998). *Life on the Line in Contemporary Manufacturing.* Oxford: Oxford University Press.

Dubois, A. and Gadde, L.-E. (2002). 'Systematic combining: an abductive approach to case research,' *Journal of business research,* 55: 553-60.

Easton, G. (2010). Critical realism in case study research, *Industrial Marketing Management,* 39: 118-28.

Edwards, P. K. (1986). *Conflict at work: A materialist analysis of workplace relations.* Oxford: Blackwell.

——— and Scullion, H. (1982). *The Social Organization of Industrial Conflict.* Oxford: Blackwell.

Elder-Vass, D., (2010). *The Causal Power of Social Structures: Emergence, Structure and Agency.* Cambridge: Cambridge University Press.

Gouldner, A. W. (1954). *Wildcat Strike. A Study of an Unofficial Strike.* London: Routledge.

Greenhalgh, J. (2014). Realist Synthesis, in Paul Edwards, Joe O'Mahoney & Steve Vincent (eds) *Studying Organizations Using Critical Realism: A Practical Guide.* Oxford: Oxford University Press.

Gustavsen, B. (2004). 'Making knowledge actionable: from theoretical centralism to distributive constructivism', *Concepts and transformation,* 9:

147-80.

Haraszti, M. (1977). *A Worker in a Workers' State: Piece-rates in Hungary* (trans. M. Wright), Harmondsworth: Penguin.

Hurrell, S. A, (2014). Critical Realism and Mixed Methods Research: Combining the Extensive and Intensive at Multiple Levels, in Paul Edwards, Joe O'Mahoney & Steve Vincent (eds) *Studying Organizations Using Critical Realism: A Practical Guide*. Oxford: Oxford University Press.

Karlsson, J. C. (2011). 'People can not only open closed systems, they can also close open systems', *Journal of Critical Realism,* 10: 145-62.

Kazi, M. A. F. (2003). *Realist Evaluation in Practice: Health and Social Work*. London: Sage.

——— Blom, B., Morén, S., et al. (2002). 'Realist Evaluation for Practice in Sweden, Finland, and Britain', *Journal of Social Work Research and Evaluation*. 3: 171-186.

Kirkpatrick, I., Ackroyd, S., and Walker, R. (2004). *The New Managerialism and the Public Service Professions,* Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Layder, D. (1998). *Sociological Practice: Linking Theory and Social Research,* London: Sage Publications.

Lindqvist, S. (1978). *Gräv där du står. Hur man utforskar ett jobb (Dig Where You Stand: How to do Research on a job)*. Stockholm: Bonniers.

——— (1979). 'Dig Where You Stand', *Oral History*, 7(2): 24-30

Lupton, T. (1963). *On the Shopfloor: Two Studies of Workshop Organization and Output*. Oxford: Pergamon

Marchal, B., van Belle, S., van Olmen, J. et al. (2012). 'Is Realist Evaluation Keeping its Promise? A Review of Published Empirical Studies in the Field of Health Systems Research', *Evaluation*, 18: 192-212.

Marginson, P., Armstrong, P., Edwards, P.k. et al. (1995). Extending Beyond Borders: Multinational Companies and the International Management of Labour', *The International Journal of Human Resource Management,* 6: 702-19.

Marsh, C. (1982). *The Survey Method: the Contribution of Surveys to Sociological Explanation*. London: Allen & Unwin

——— (1988). *Exploring Data: An Introduction to Data Analysis for Social Scientists,* Cambridge: Polity Press.

Miles, M. B. and Huberman, A. M. (1994). *Qualitative Data Analysis: An Expanded Source Book* (2nd edn). London: Sage.

Miles, R. E. and Snow, C. C. (1978). *Organizational Strategy, Structure and Process,* New York: McGraw-Hill.

Mutch, A. (2007). 'Reflexivity and the institutional entrepreneur: A historical exploration', *Organization Studies,* 28: 1123-40.

Muzio, D., Ackroyd, S., and Chanlat, J. F. (2008). *Redirections in the Study of Expert Labour: Established Professions and New Expert Occupations*. Palgrave Macmillan.

Pawson, R. (1989). *A Measure for Measures: A Manifesto for Empirical Sociology*. London: Routledge.

——— (2006). *Evidence-based Policy: A Realist Perspective*. London: Sage

Pawson, R. and Tilley, N. (1997). *Realistic Evaluation*. London: Sage

Pollert, A. (1981). *Girls, wives, factory lives*. London: Macmillan.

Porter, S. (2000). 'Critical Realist Ethnography', in S. Ackroyd and S. Fleetwood (eds), *Realist Perspectives on Management and Organisations*. London: Routledge.

Ram, M., Edwards, P. K., Jones, T., Kiselinchev, A., and Muchenje, L. (2014). Pulling the Levers of Agency: Implementing Critical Realist Action Research, in Paul Edwards, Joe O'Mahoney & Steve Vincent (eds) *Studying Organizations Using Critical Realism: A Practical Guide*. Oxford: Oxford University Press.

Reed, M. (1985). *Redirections in organizational analysis*. London: Tavistock.

——— (2008). 'Critical Realism : Philosophy, Method, or Philosophy in Search of a Method', in D. Buchanan and A. Bryman (eds), *The SAGE Handbook of Organizational Research Methods*. London: Sage, 430-48.

Rees, C. and Gatenby, M. (2014). Critical Realism and Ethnography, in Paul Edwards, Joe O'Mahoney & Steve Vincent (eds) *Studying Organizations Using Critical Realism: A Practical Guide*. Oxford: Oxford University Press.

Rolfsen, M. and Knutstad, G. (2007). 'Transforming management fashions into praxis Action research project in AutoParts', *Action Research,* 5: 341-57.

Ryant, C. (1988). 'Oral History and Business History', *Journal of American History*, 75: 560-66.

Sayer, A. (1992). *Method in Social Science: A Realist Approach*. London: Routledge.

——— (2000). *Realism and Social Science*. London: Sage.

Selznick, P. (1949). *TVA and the Grass Roots: A Study in the Sociology of Formal Organization*. Berkeley: University of California Press

Siggelkow, N. (2007). 'Persuasion with Case Studies', *Academy of Management Journal,* 50: 20-4.

Smith, Chris (2005). 'Beyond Convergence and Divergence: Explaining Variations in Organizational Practices and Forms', in S. Ackroyd, R. Batt, P. Tolbert et al. (eds), *The Oxford Handbook of Work and Organization*. Oxford: Oxford University Press, 620-35.

——— and Meiksins, P. (1995). 'System, Society and Dominance Effects in Cross-National Organisational Analysis', *Work, Employment and Society,* 9: 241-67.

Taylor, P. and Bain, P. (2005). '"India Calling to the Far Away Towns": the Call Centre Labour Process and Globalization', *Work, Employment and Society,* 19: 261-82.

Wong, G., Greenhalgh, T., and Pawson, R. (2010). 'Internet-Based Medical Education: A Realist Review of What Works, for Whom and in What Circumstances', *BMC Medical Education*, 10(12): 1-10.

Yin, R. K. (2009[1994]). *Case Study Research: Design and Methods* (4th edn). London: Sage.